
仮面ライダーディケイド

桂 ヒナギク

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

仮面ライダーディケイド

【Nコード】

N8912Z

【作者名】

桂 ヒナギク

【あらすじ】

司の前に現れたキュレックスワーム。司が傍らにあったバックルを手にした時、その瞳は何を見る？

1・誕生

荒野で様々な仮面ライダーが戦いを繰り広げている。
その中にぽつんと一人佇む少女、山上^{やまがみ} 洋子^{ようこ}。
周囲で爆発が起こる。

「きゃっ！」

吃驚^{びっくり}してしゃがみ込んでしまう洋子。

洋子の前に一人のライダーが現れる。

「デイケイド？」

夢はそこで終わった。

ベッドから起き上がる洋子。

「また同じ夢……？」

洋子はベッドを下りてトイレへと向かう。

（あの夢って何なの？ いつも同じ夢ばかり）

トイレを済ませ、洗面所へ行行って顔を洗い、歯磨きをし、部屋に
戻ってクローゼットを開けて寝間着からセーラー服に着替える。

着替えが終わったら一階のリビングへ行き、食卓に着く。

向かいの席には居候^{いそうこう}の秋山^{あきやま} 司^{つかさ}が座っている。

「おはよう、司」

「ああ、おは洋子」

「……つまんない」

「そうか」

「これ全部、司が作ったの？」

「当然だろ」

「いただきまーす」

洋子は食事を始める。

「ところで洋子、何でセーラー服？ 今日は休みだぜ」

「補習よ、ほ・しゅ・う」

「頑張れ」

一足先に食べ終わった司は席を立つ。

「洋子、俺出掛けてくるな」

「どこへ行くの？」

「君には関係ない」

司はそう言つと、リビングを出て玄関へ行き、靴を履いて山上家を後にする。

洋子は思った。

（何よ、あいつ）

*

とある公園。

司はそこに居た。

時刻は午後三時。洋子の補習も終わっていた。

「司！」

洋子が司の下に現れる。

「洋子か。何でここに来た？ 補習は終わったのか？」

「うん、終わったよ。ここに来たのは司が居たからだよ」

「そうか」

その時、司と洋子の間に灰色のオーロラが現れた。

「何だこりゃ？」

洋子の後ろにもう一人の洋子が現れる。

「洋子、後ろ！」

「へ？」

洋子は背後を振り向いた。

「わ、私？」

もう一人の洋子は、「消えて」と言つと、仮面ライダーカブトのキュレックスワームに姿を変えた。

「キュレックスワームだと!？」

司は目の前の出来事に驚いていた。

「洋子、その辺にバックルとライドブッカー落ちてないか!？」

辺りを見渡す洋子。

(あつた!)

洋子はバックルの下へ駆け寄り、それを司に投げ渡した。

司はバックルを見事にキャッチすると、それを腰に装着した。

バイクのエンジンのような音と共にライドブッカーが左腰に現れる。

司はライドブッカーからDECAD Eと書かれたカードを取り出し、バックルに差し込んでサイドハンドルを閉じた。

「変身!」

ハ K A M E N R I D E ― D E C A D E ャ

司はそのマシンヴォイスと共に黒とマゼンタの仮面ライダーデイケイドへ姿を変える。

「よし!」

デイケイドは灰色のオーロラをすり抜け、キュレックスワームに攻撃を仕掛けるが、クロックアップで避けられてしまう。

「ちょこまかと!」

デイケイドはカードを取り出し、バックルに差し込む。

ハ K A M E N R I D E ― K A B U T O ャ

電子音声と共にカブト・ライダーフォームに姿を変えるデイケイド。

Dカブトはカードを取り出してバックルに差し込む。

ハ A T T A C K R I D E ― C L O C K U P ャ

0.01秒の出来事。Dカブトはキュレックスワームに攻撃を仕掛けて怯ませると、ライドブッカーからカードを取り出してバックルに差し込む。

ハ F I N A L A T T A C K R I D E ― K A K A K A K A B U T O ャ

マシンヴォイスと共に回し蹴りをキュレックスワームに叩き込んで爆砕するDカブト。

カブトカードがディケイドドライバーから飛び出し、カブトの絵が灰色のシルエットに変わると同時にディケイドに戻るDカブト。

「絵が消えた？」

ディケイドの変身が解ける。

「司、今のってディケイドだよな？」

「何で知ってたんだ？」

「夢で見たのよ」

「ふーん」

司は八枚のカードを取り出す。

「みんなシルエットになってる……」

司は九枚のカードをしまった。

「取り敢えず帰るか。行くぞ、洋子」

司と洋子は帰路に就いた。

2・クウガの世界

家に帰り着いた司と洋子。

リビングに入ると、壁に背景ロールがあった。

「何これ？」

疑問符を浮かべる洋子。

司は思った。

（これって仮面ライダーディケイドにあったのと同じようなものか？
？ ということは、これで異世界巡りが出来る、と？）

「司？ おーい」

「ん、どうした？」

「これって、司が用意したの？」

洋子が背景ロールを指差しながら言った。

「俺は知らん。けど、これが何かは察しがつく」

「何なの？」

パラレルワールド

「異世界を巡るための道具だ」

「パラレルワールドって？」

「この世界とは別の世界ってことだ。ま、説明するより実際にやった方が早い」

司は背景ロールに繋がっている鎖を引っ張った。

すると、別の背景が上から降りてくる。同時に司の服装が警察官の制服に変わる。

「司、服装が変わったわよ？」

「ああ……」

司はテレビをつけた。

画面に未確認生命体と、それと戦う仮面ライダークウガが映る。

「ここはクウガの世界か」

司は玄関に向かう。

「どこへ行くの？」

「怪物と戦ってくる」

「待つてよ。私も行くわ」

「危険だからお前は来るな」

司はそう言つて家を出た。

家の前にはマシンディケイダーが止まっていた。

「これは……。ん？」

司のポケットには鍵が入っていた。

「マシンディケイダーの鍵か？」

司はマシンディケイダーの鍵穴に鍵を差し込んで回し、エンジンをかけた。

（行くか）

司はアクセルを回し、マシンディケイダーを発進させた。

*

とある廃墟でクウガが未確認と戦っている。

その様子を見ているのは、警視庁捜査一課に務める小島^{こじま} 緑警部^{みどり}だ。

そこへマシンディケイダーに乗った司が現れる。

「仮面ライダークウガ、か」

緑が司に気付いて言う。

「あなた、こんな所で何してるの？」

「怪物退治を手伝おうと思つてな」

司が言うと同時に、未確認がもう一体、クウガの前に現れた。

「二体がかりで来るとは卑怯な」

司はバックルを装着、カードを取り出した。

「変身！」

カードをディケイドライバーに差し込み、サイドハンドルを閉じ

る。

「KAMEN RIDE——DECADE」

マシンヴォイスと共にディケイドへ変身を遂げた司はクウガの下に駆け寄る。

「手を貸してやる」

「どこの誰だか知らないが、助かる！」

「一撃で終わらせてやる」

ディケイドはカードをディケイドライバーに差し込んでサイドハンドルを閉じた。

「FINAL ATTACK RIDE——D D D DECADE」

十枚のカード型ホログラムがディケイドと未確認の間に現れ、ディケイドはそこを突き抜けて必殺技のデイメンションキックを未確認に浴びせて粉碎した。

（ディケイドだ！？）

クウガは未確認を放置してディケイドに襲いかかった。

「うおおおお！」

弧を描いて吹っ飛び、地面を転がるディケイド。

「何すんだよいきなり!？」

「お前のことは聞いている。この悪魔！」

クウガは、「超変身！」と、紫のタイタンフォームになると、側にあった角材を拾ってタイタンソードに変化^{へんげ}させてディケイドに切り掛かる。

ディケイドはライドブッカー・ソードモードで受け止める。

「落ち着け、クウガ！」

「五月蠅い！ お前は世界を破壊する悪魔。だからここで消す！」

クウガが言うと同時に、未確認が攻撃を仕掛けてきた。

「邪魔なんだよ！」

クウガはタイタンソードで未確認を真っ二つにした。

爆裂霧散する未確認。

ディケイドはライドブッカードからカードを取り出してディケイド
ライダーに差し込む。

ATTACK RIDE ILLUSION

ディケイドが三人に増え、クウガをたこ殴りにして……。

聖なるゲーム

三人に増えたディケイドがクウガをたこ殴りにする。

「ぐはっ！」

大ダメージを食らい、倒れて変身が解けるクウガ。

ディケイドは一人に戻り、サイドハンドルを開いて変身を解く。

「クウガ、俺を潰すんじゃないかったのか？」

司は横たわる男の下に歩み寄った。

「くっ……強い……」

「ところで、お前の名は？」

「桐谷 きりや ゆうすけ 雄介……だ……」

「それにしても、雄介、ずいぶんとボロボロな」

「お前がやったんだろ……」

「お前が襲いかかってきたからな」

雄介は覚束無い足取りで立ち上がる。

「お、まだやるか？」

そこへ緑がやってきて、司の頬に平手打ちをする。

ピシッ！

「痛えじゃねえか！」

「私の雄介に何て酷いことを！」

「緑、いいよ。悪いのは俺の方だし……」

「でも！」

「いいからいいから。で、ディケイド、お前の名は？」

「秋山 司だ」

「そうか、覚えとく」

雄介は立ち去ろうとする。

「雄介、待って」

後を追う緑。

司はマシンディケイダーの下へ行き、エンジンをかけて跨がり帰

路に就いた。

*

山上家に戻った司。

「お帰り」

と、洋子が出迎える。

「怪物退治はどうだった？」

「怪物は倒せたが、クウガが襲いかかってきてな」

「クウガ？」

「未確認生命体第四号のこと」

「へえ、そんな名前なんだ」

二人はリビングへ移動する。

「で、司はこの世界で何をするの？」

「分からない。だから取り敢えず遊んでみる。 Grongi って奴らとな」

「Grongi？」

「この世界に存在する怪物のことだ」

司は九枚のカードを取り出す。

「しかし、これはどうすれば戻るんだ？」

その時、司の無線から音声けいらいが。

「警視庁より各警邏隊に告ぐ。未確認生命体第十号出現。場所は東

京湾沿岸。至急現場に急行せよ」

「よし、じゃあ行ってくる」

「死なないでよ」

「分かってる！」

司は家を出て行った。

＊

東京湾沿岸。

グロンギが男性を襲っている。

そこへマシンディケイダーで現れるディケイド。

グロンギはディケイドに気付いて振り向いた。

「クウガバ？」

「クウガ？ 違うな」

ディケイドはグロンギに突進、蹴り飛ばした。

おまえたちは

なぜひとをころす

「ゴラゲダチパ、バゲジドゾボソグ？」

せいなるゲーム

きゆうぎよくのやみ

のふっかつ

「ゲギバスゲゲル。ビュゲビョブンジャリンスババツ」

（究極の闇？ まあ、いいか）

ディケイドはディケイドライダーにカードを装填してサイドハンドルを閉じる。

FINAL ATTACK RIDE——D D D DECADE

マシンヴォイスと共にディメンションキックをグロンギに放つディケイド。

グロンギは悲鳴をあげながら爆裂霧散した。

その直後、雄介がバイクでやってきた。

「雄介か。ちょうどいい所にやってきた」

「何だ、ディケイド？」

「グロンギの連中、究極の闇を復活させるための聖なるゲームをやつてるらしい」

「究極の闇って何だ？」

「知るか」

ディケイドは変身を解いた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8912z/>

仮面ライダーディケイド

2012年1月5日08時48分発行